

# 明日の美術

国松登

編集部から「明日の美術」と題して二つのテーマがあたえられました。一つは「本道における公募展の果たした役割とその批判」もう一つは「現代絵画の混迷とそれからの脱却」ということです。これは大へん大きな課題であり、また私どもが明日の美術の在り方について単純な予言や予測の出来る筈もないのです。ただ全道展が今年十五周年を迎えるに当り、本道公募展の歴史を少しく振り返り、過去の反省と公に本道の公募展の当面の問題を考えてみたいと思います。

本道の公募展は北海道美術協会（道展）の小史が物語るように三十年を数えています。その前半の十五年間と全道美術協会（全道展）が設立され、二つの公募展が生まれてからの十五年間では本道の美術の動向に明らかな変貌がみられました。それは言うまでもなく、両展の間に著しい活気がみられたということです。

## 〈公募展の意義〉

もともとこの二つの公募展には、会としてのはつきりとした旗印や絵画上の主義、主張があつたのではないから、そういう意味での曖昧さがあつた代わり、広く本道美術の向上発展をはかるという共通の目的は持つていた訳です。随つて各作家はこの公募展を通じて自己の作品を披歴し、自己の命ずるままに仕事の研鑽に励んでいるのですが、公募展という或る種のムード（審査、授賞、会員推荐など）の中では、自から一つの作品傾向が時流をつくるということも生まれて来るのです。例えば前年度の受賞作品の類似的作品が多く現われるとか、一地方の出品者層の作風が類型性を帯びて来るといふ作品の偏向がみられることなどがあげられます。会の内部においても「会員は力作を出品し、会の中心的役割を果たさなければならない」といふ意見と「会員の作品は点数や大きさを制限し、一般出品者を優遇すべきだ」といふ意見があつて、いつも対立するのですが、その都度二つの意見はそれぞれ筋が通つていられると思われ、公募展というものは会員と出品者の作品の均衡が保たれることが理想であるから、この双方の意見が生きていなければならないと思われ、今もなお思われます。

しかし現在のように会場の広さに限界があり、益々出品が増えてゆく状況から、新人の優遇にも自から限界が生ずることになります。いずれにしても資質の良い作家を優遇して、会全体の質の向上を計らなければならぬことは謂うまでもありません。今の公募展が厳選とか寛選とかいつてみても、それは一に会場の問題に關わるのであつて、会場がゆるされるならばその中で出来るだけ多くの作家が、時間をかけて自己の作品を披歴すべきだろう。私は全道展の発足当初に、公募展の形式をとらず飽くまでも会員相互の作品研鑽の場として推薦制度による同人展の形式をとりたいと主張したのも、公募展の種々の弊害の面を考えたこと、道内において徒らな会の対立を避け



人形と手芸の店

# マリヤ

札幌・北1・西3  
TEL・2-3307

たいと考えたからです。しかし当時の事情からみて、新しい意欲に燃えた生気ある公募展の誕生が期待されたことも当然であり、結果として数多くの新人がこの全道展を基盤として、急速に中央画壇に進出しました。中央各会の道出身会員を網羅している全道展には自から各派各流の作品が集まり、極く自然に一種の無性格の性格とでもいうものが出来上つていたのです。随つて会の性質上、傾向別による作品の高低が生じたり、会場の壁面に限りがあるため陳列上の不備があるにもかかわらず、公募展の魅力は（本展に限らず）他の作家の作品と自分の作品を一堂に会して比較、観照出来ることや、先輩作家の審査による作品評価の裏づけによつて自己の制作の方途を新しく発見するところにあるのかも知れない。全道展の作品は中央団体の幾つかの出品者グループに分けられ、そのグループにはそれぞれの主張と特色が現われているが、近年は一見新しい一つの勢力に覆われつつあるかにみえます。

#### 〈現代絵画は行詰つているか〉

それは戦後間もなく国外の交流が頻繁となり、マスコミの拡大と共にわが国の画壇においても既成絵画に対する前衛絵画の擡頭が目立ち、抽象、非形象の作品が非常な速さで大きな流れをつくりました。そして漸くこれらの作品が大衆の中に理解し始められた頃、画壇の一部から模倣的前衛絵画の氾濫に対する不審の声が起り初めていることも注目されます。最近、各方面（批評家や美術ジャーナリズム、一部の画家の間で）から「現代絵画の行詰まり」とか「現代絵画の混迷」の声が高まつているのもその一つです。確かに現代の画壇は目まぐるしく、息苦しい。だが、私共が身を持つてその息苦しさを混迷を感じ取つた時に、画家の内部に起る新しい苦悩の中に今日的意義や作画の張りがあるのではないだろうか。

印象派を契機とした現代絵画が野獣派、立体派、抽象主義、超現実主義から更に派生的に複雑なエコール（派）を生み出しているが、いろいろの意味で技術的にも内容的にも、これほど絵画の多様性を識らされた時代はないと思います。戦後新しい美術の動きは絵画の既成概念を大きく変革しました。それは第一次大戦後の運動とは比較にならない程の激しさを持つています。私も今こそこの実験の中から、各自の体験に基づいて自分の内部や外部を掘り下げる以外に方法はないのです。表現技法の上からみても過去の十年の歩みは今日の一年にも満たない。海外の交流とマスコミの発展につれて、世界の美術の動向は非常なスピードで感取され、美術雑誌などによる作家の制作過程や技法の公開は、あたかもビデオテープの如く懇切丁寧に分解説明されています。

その後、私は絵画の新しい材質や技法が独自性を持つと、自体が内容の意味を持ち初めると主張したことがある。それは極く一般的意味で油絵の持つ材質の特種性から、多分に工芸的要素が深まり、近年の新しい用材や技法の外様性と相俟つて妖しい美しさを創り出すことを意味し、その不思議な美しさが独自性を持つ場合、それが一つの新しい内容となつた例をしばしば見かけたからでもあります。ところが今日のように模倣的技術の氾濫や単なる画面の効果にのみ走つた作品が多くなるにつれ、私の前述の意味に一つの不安を感じ始めました。私はここで再び単なる画面のムードに溺れない、技術以前のユニーク（独自）な内容とか、作品の上に現われる抜き差しならない作家の体質のようなものを、永い時間をかけて真剣に考えなければならぬことを告白し、この責を終えたいと思います。

札幌名代の店

札幌

天政